

# 純ちゃんのコーナー

(ロータリー3分間情報)

Part XIII



伊丹ロータリークラブ

深川 純一

## 目 次

1. 「ロータリアンとは」 その1	2
2. 「ロータリアンとは」 その2	3
3. 「ロータリアンとは」 その3	4
4. 「ロータリークラブはクラブである」 その1	5
5. 「ロータリークラブはクラブである」 その2	6
6. 「ロータリー・モザイク」その1	7
7. 「ロータリー・モザイク」その2	8
8. 「ロータリー・モザイク」その3	9
9. 「ロータリー・モザイク」その4	10
10. 「ロータリー・モザイク」その5	11
11. 「ロータリー・モザイク」その6	12
12. 「ロータリー・モザイク」その7	13
13. 「ロータリー・モザイク」その8	14
14. 「ロータリー・モザイク」その9	15
15. 「ロータリー・モザイク」その10	16
16. Harold Thomas 著「ロータリー・モザイク」総括	17

## 序にかえて

竹中秀夫会員の発想によって始まったこの3分間情報「純ちゃんのコーナー」も、光陰矢のごとし、早くも13年の歳月を閲しました。

昨年度は、クラブ会長エレクトの山地秀俊会員の主催で「ロータリー・モザイク研究会」が実施されました。ベテラン会員を初め、若い会員達も熱心にロータリーを学ばれたのは真に素晴らしいことでありました。

或る時、私は、中島耕作会員の話を聞き、素晴らしいと思って、そのレジュメを神戸須磨クラブの大内晋二さんに見せましたところ、入会后未だ日も浅い若い会員がこんな凄いレジュメを書くとは驚いた、伊丹クラブは素晴らしいと感心されて、この読書会に参加されることになりました。これも真に嬉しいことでありました。

顧みますと、伊丹クラブのロータリーを学ぶ心は、クラブ創立以来のこのようであります。私が入会した当時、既に、定款細則研究委員会がありました、そのメンバーは、チャーターメンバーの古市会員、朝香会員、三宅会員、荻田会員、富永会員そして神戸大学教授の堀会員達の錚々たるメンバーでありました。後に私もその末席を汚すことになりましたが、富永会員の話では、創立当初から電話が掛かってくると、チャーターナイトをどのようにするかとか、その他ロータリーの諸々のことについて1時間以上も話し込むのが常であったということでありました。

私は、上島会員や英賀会員達と共に例会やファイヤーサイドミーティングその他諸々の会合でこれらの先輩達から色々とロータリーを学ぶことができました。

私達は、毎例会後、喫茶店でロータリーのことを1時間ほど話し合い、その夜は北の新地で楽しい一時を過ごしました。当時、英賀会員が北の新地に持っていた店の2階を改装して私達が集まるクラブを作りました。名付けて「King and Queen」。ここは、ロータリー談義の場であり、夜の新地へ出る前の拠点でもありました。

実は、現在のロータリー勉強会「エキストラ会」も、上島会員が新地で酒を飲む時は、何時もコニャックの最高級品ヘネシーのエキストラを愛飲していましたので、ロータリーも最高の品質を目指すという意味を込めて名付けたものであります。したがって、エキストラ会は、単に上質な酒を飲むという会ではなく、1時間ほどロータリーを真剣に学んだ後で食事をするという会なのであります。

何はともあれ、ロータリーは、人作りにおいても、もの作りにおいても、最高のものを目指すという質の探求が至上命題であり、これは、伊丹クラブの伝統でもあります。伝統は、実践の内に生まれ、実践の内に伝承されていくものであります。私達は、伊丹クラブのこの素晴らしい伝統を守り伝えなければならないと思います。

最後に、この一年間、私の話を根気よく聴いて下さったクラブの皆さん方の友情と寛容に心からなる感謝を申し上げますと共に、この小冊子の発刊に御尽力を賜りました竹中秀夫会員、委員長の中島勝美会員はじめクラブ事務局の皆様方に心からなる感謝を捧げてペンを擱きたいと思っております。有り難うございました。

## 1. 「ロータリアンとは」 その1

「ロータリーの友」の今年の4月号の巻頭記事に宗教学者山折哲雄先生の講演録が紹介されていましたが、その中に「出迎え三歩、見送り七歩」という話がありました。大変、感銘深い話でありましたので紹介しておきます。

それは、3、4年前、先生が東京からの来客と京都のホテルで会う約束をされましたが、約束の時間に30分ほど遅れてしまったとき、その方は既にホテルのエントランスホールの前に立って待っておられた。傍に走り寄ってお詫びをしたところ、その方は、『出迎え三歩、見送り七歩と謂いますからね。』と仰って、ニコッとされたというのであります。それは、「出迎え三歩の気持でお待ちしていましたから、何らお気遣いなく」という御挨拶であります。

そのあと、喫茶室で小一時間お話をしてお別れをする時になって、その後の方の言葉「見送り七歩」が蘇りました。即ち、見送り七歩。ホテルの前でお別れをして背中を見せて帰って行く、その自分の姿をじっと「七歩」という気持で見送られるつもりなのか、と思って、その時また全身から汗が噴き出して来たというのであります。ただ、「出迎え三歩、見送り七歩」という言葉は、初めて聞いた言葉なので、先生は色々調べられたのですが何処にも見あたりませんでした。

その後、随分経ってから、江戸幕府の大老井伊直弼が終生真心を籠めて書いた『茶湯一会集』という書物に出遭って、その言葉の心が解ったというのであります。即ち、茶の席を設ける主人が客を招きます。その時刻になると、主人はその庵の門前に立っ

てじっと待っていると、向こうから客人がやってきます。出迎え三歩の心得であります。井伊直弼は「出迎え三歩」という言葉を使っていませんが、茶の湯はここから始まるということを謂っています。

出会って挨拶を交わして、茶席に招き入れて対座します。茶を点でてこれを差し上げ、自分も一緒に服します。一刻二刻話を交わしてやがて茶の湯の席が果てます。客を門口まで送って行きます。そこでまた、軽く別れの挨拶を交わして、客は背中を見せて帰っていきます。主人は、その姿が消え去るまで見えています。

井伊直弼は、ここで「見送り七歩」という言葉を使っていませんが、その心を問われると、ぴったりとその言葉と情景が重なると先生は言われるのであります。

最近、「もてなし」という言葉がよく使われますが、この言葉の意味は何か。英語にHospitalityという言葉があり、西欧社会における歓待するという意味であります。これは、日本文化の中に伝えられて来た「もてなす」という言葉とは一寸意味が違う。

その違いは一体何かと考えていた時に、『出迎え三歩、見送り七歩』という言葉に出会って、その時に初めて、日本語の「もてなす」ということの本来の意味がそこにあるのではないかと先生は思われたのであります。

人との出会いが終わった後に始まる「もてなし」、それが窮極の奉仕というものではないか、詰まり、その根本にあるものが「おもいやり」という問題であったと先生は説かれるのであります。その具体例を次回に紹介します。

## 2. 「ロータリアンとは」 その2

前回は、「ロータリーの友」4月号の巻頭論文、宗教学者山折哲雄先生の話の中の「出迎え三步、見送り七歩」という話を引用致しましたが、今日は、その具体例を話します。それは、当地区の名ガバナーであられた西宮ロータリークラブの執行孝胤バスターガバナーの話であります。執行先生は、当地区のRYLAが今から35年前に始まった年度のガバナーであり、ロータリーの大先輩として私は公私に亘り心温まる薫陶を受けましたので、色々な思い出があります。

或る時、北新地のバーで先生と一献傾けていましたが、丁度来合わせた親友の割烹の親父とこれも親友のそのバーの経営者と4人でゴルフに行こうと謂うことになりました。そこで、先生は、「私は鳴尾クラブのメンバーだからエントリーしておくよ」と仰って、その場で日時を決めて、スタートは午前9時と決まりました。そこで当日、私達3人は揃って8時にクラブに参りましたところ、先生は、既にクラブの玄関でスーツ姿で立って私達を待っておられました。

私は吃驚して、「先生、こんなに早くどうしたんですか」と言いますと、先生は、「私は、ここのメンバーだから、ビジターをお迎えする時は、早く来て相手をお迎えするのは当然でしょう」と仰ったのであります。

先生はその時「出迎え三步」と謂う言葉は使われませんでした。今考えますと、あのときの情景が将に「出迎え三步」であったなと思うのであります。

やがて、ゴルフが終わって、皆で楽しく食事をして帰る時になって、プレーフィアの精算をしようとする、既に先生が精算

されていて「今日はメンバーの私に任せて下さい」と仰いました。私達は、元来、割り勘（兵隊勘定）で遊ぶことはありませんでしたので、ここは先生に甘えることにしたのであります。問題はその後でありました。私達がスーツに着替えてクラブを出るとき、先生は矢張りクラブの玄関で最後まで私達の車を見送って下さいました。今、顧みて、これが「見送り七歩」であったのであります。

執行先生が亡くなられてから、もう15年になりますが、山折哲雄先生の論説を読んで、まざまざとあのときの情景が蘇った次第であります。

私は、この時、執行先生にクラブというものの本質を教えられた思いでありました。そして、ロータリークラブもクラブでありますから、ビジターをお迎えするクラブの在り方、ビジターに応接するロータリアンの心構を謙虚に反省しなければならないと思ったことでありました。このことは取りも直さず、山折哲雄先生の説かれる「出迎え三步、見送り七歩」に関わる「もてなし」の問題であります。

人との出会いが終わった後に始まる「もてなし」、それが窮極の奉仕というものではないか、詰まり、その根本にあるものが「思いやり」という問題であったと先生は説かれるのであります。したがって、私は、この「思いやりの心」こそロータリアンの心の根底にあるべきものである、と思うのであります。

### 3. 「ロータリアンとは」 その3

前回は、人との出会いが終わった後に始まる「もてなし」、それが窮極の奉仕というものであり、その根本にあるものが「思いやり」という問題であったという山折哲雄先生の話を紹介しました。したがって、私は、この「思いやりの心」こそロータリアンの心の根底にあるべきものである、と思うのであります。

そこで、人との出会いについてのロータリアンのマナーについて考えてみたいのであります。

例えば、井坂孝ガバナーは、昭和6年から8年にかけて2期連続のガバナーであります。日本のロータリーの地区管理をルールに乗せた人です。まず、ガバナー月信を通じて、ロータリーの精神を解説し、提唱しました。或る時は文語体で、或る時は口語体で、また或る時は候文でもって提唱しました。このように、新しい時代へ向けて文章のスタイルが入り乱れ、不統一な時代でありました。

しかし、今日では、その全貌を知ることが出来ません。断片的にしか記録が残っていないからであります。夙に有名なのは、1931年、昭和6年8月10日付けガバナー月信第1号であります。

『私は、日本全国のロータリークラブを管轄するガバナーとして、ロータリアンが必ず守らねばならない3ヶ条を提示するので、拳々服膺せられたい』

と謂って次の3ヶ条を提示したのであります。

第一に曰く、ロータリアンたるものは、約束を守るべし。

第二に曰く、ロータリアンたるものは、

賄賂を贈る事なかれ。

第三に曰く、ロータリアンたるものは、徒に慈善事業に憂き身をやつす事なかれ。

第一の約束を守るというのは、ロータリアンは、皆職業人でありますから、あらゆる取引において契約を守るということを意味しているのであります。即ち、これは契約的正義の実現を説くものであります。契約を守るということは、ロータリアン自らの信用を確立する基本前提であります。洋の東西を問わず、約束を守ること、契約を守ることの出来ない人間は、結局、落ちこぼれて行かざると得ないのであります。

しかし、私の体験したところでは、最近、契約を守らないで恥じないロータリアンも現れました。淋しく、また、悲しいことではあります。

また、約束を守る、ということは、時間を守るということの意味します。時間は、自分一人のものではなく万人の共有物であります。時間を守らないと謂うことは他人に迷惑をかけることになり、更に、自らの信用を失うことになります。したがって、ロータリーでは、時間を守るということが昔からの精神伝統になっているのであります。それ故にこそ、ロータリーに魅力があったのであります。

ところが、最近、例会に遅刻しても、平然として、恥ずかしいとも思わないロータリアンが増えてきました。これではロータリーに魅力など生まれる筈がないのであります。Guy Gundakerは、このような人はロータリークラブの会員ではあるが、ロータリアンということは出来ないと断言しているのであります。

## 4. 「ロータリークラブはクラブである」 その1

今日は、「ロータリークラブはクラブである」ということについて話します。

ロータリークラブはクラブであります。

したがって、クラブというものの基本的性質（クラブ性）から出て来る大きな特徴の一つは、クラブの会員は、クラブが提唱する理念や目的事項を行動として実践しなくても何らの制裁をうけない、ということです。これに対して、クラブと同根の政党の場合は、党則違反、倫理違反等によって制裁があります。

そこで、ロータリークラブのクラブ性を明らかにするため、中世ヨーロッパにおけるクラブ発祥の歴史を顧みながらクラブと政党との原理的な関係を眺めてみたいと思うのであります。

まず、クラブと呼ばれる社交団体が歴史上発生したのは15世紀前半のイギリスにおいてでありまして、クラブ活動というのが圧倒的に盛んになったのは、エリザベスI世時代の17世紀のことでありました。

当時、イギリスの国家的大動乱が国王対国民という形で進められていたのでありますが、人々が国家に対する考え方を交換する場としてクラブを利用したのであります。

また、当時、コーヒー店に知名人が集まり、これが人々の親睦と意見交換の場としてのクラブの発達を助長したのであります。

このようにクラブは、政治的、文化的、経済的その他、人々のアイディアの交換の場として用いられたのでありますが、これらのクラブの中で知名度の高かったのは、トーリー党支持者の集まる White's とホイッグ党支持者の集まる Brook's でありました。

ところが、やがて、政権が交替すると政争に負けた方のクラブの首領の首が飛ぶようなことになり、元来、親睦の場であるべきクラブが政争の具となることは穏やかでないとして政治的中立を求める人達だけがクラブに集まるようになり、政治を好む人達は、クラブから別れて政党を組織するようになったのであります。このようにクラブと政党とは元来同根であったのであります。したがって、日本の政党にも新自由クラブなどという名称があったのは、その名残であります。

このように、クラブと呼ばれる社交団体を人類社会に存在する諸々の団体組織と比較してみると、その大凡の特質としては、第1に親睦団体であること、第2に管理運営権を有する者と会員との間の支配・被支配の関係、詰まり権力服従の関係は殆ど存在しないこと、第3に会員に対する統制的要素が殆どないことなどが挙げられるのであります。

以上のようなクラブの基本的性質からして、ロータリークラブは政党のように権力を行使するものではなく、あくまでも倫理を提唱することによって人々の意識改革を行うものなのであります。これが、ロータリー運動が倫理運動であると謂われる所以でありまして、ロータリーは倫理運動としてしか機能し得ないものなのであり、運動体として機能する力は極めて弱いのであります。

## 5. 「ロータリークラブはクラブである」 その2

前回は、ロータリーは、クラブであるが故に倫理運動としてしか機能し得ないものであり、運動体として機能する力は極めて弱いということを申しあげました。

このことについてポールハリスは、1934年に“*This Rotarian Age*”という著書の中で『ロータリーの長所は、団結力のないところにある』と謂っています。即ち、ロータリーが他の社会対に対して誇るに足るべきものは、団結力を持っていないことであります。しかし、団結力はないが、良質な主体性があるのであります。

行動の団結はないが精神の団結・心の団結があります。心が通い合うのであります。

精神の団結・心の団結はあるが行動の団結がないのがロータリーなのであります。

このため、ロータリークラブは、組織体としては非常に弱いのであります。詰まり、換言すれば、会員の「わがまま」を十二分に尊重される社会体であります。したがって、ロータリークラブには団結力がありません。あるものは、一人ひとりの良質な主体性であります。

ところで、ロータリーが倫理運動として機能する場合に三つの媒体があります。

即ち、ロータリアン、ロータリークラブそして国際ロータリーの三つであります。

そこで、この三つの媒体をそれぞれその機能の視点から眺めて見ますと、先ず、第1に、ロータリアンは、奉仕の実践者であり、実践するのは一人ひとりのロータリアンでありますから、これは当然のことながら個人奉仕であります。したがって、ロータリアンは、奉仕の実践をするに就いては、何の制約もなく自由闊達にすることが出来

るのであります。テリトリーの制約も全くありませんから、地域社会だけでなく世界中何処でも奉仕の実践ができます。詰まり、ロータリアンは、現在、自分が居るところで何時でも奉仕の実践ができるのであります。例えば、伊丹クラブのロータリアンの個人奉仕がロンドンで花開くこともあるのであります。

第2に、ロータリークラブは、原則として奉仕の実践ができないのであります。但し、例外的に社会奉仕及びその延長線上の国際奉仕については1923年のセントルイス国際大会の決議23-34号第6項の制約の下においてのみ団体的社会奉仕が実践出来るのであります。

このように奉仕の実践については、先ず、ロータリアンの個人奉仕が原則であり、次に、クラブの団体奉仕が例外的に認められているのであります。そこで、

第3に、国際ロータリーは、奉仕の実践が出来ないことになっているのであります。それは何故か、と言いますと、国際ロータリーの前身である全米ロータリークラブ連合会が創立されるに際して、当時、全米に存在した16クラブが全米ロータリークラブ連合会に委託した仕事は、奉仕理念の追求、ロータリーの拡大、そして情報の媒介機能の三つだけでありまして、奉仕の実践は委託事業ではありません。奉仕の実践は、ロータリアンとクラブの専権事項なのであります。



## 7. 「ロータリー・モザイク」 その1

今日から暫くの間「ロータリー・モザイク」というテーマでお話申し上げたいと思います。その動機は、今年度のクラブ会長エレクトの山地秀俊会員が1959～60年度の国際ロータリー会長Harold Thomas ハロルド・トーマスの名著「ROTARY. MOSAIC」の読書会を企画、立案、実施されたことにあり、私は我が意を得たりとばかり非常に嬉しく思った次第であります。

Harold Thomas は、1923年にロータリアンとなった人であり、今から数年前103歳の長寿を全うしてこの世を去りましたが、この本は、彼が、Paul P.Harris を始め歴代のロータリーの指導者から直に話を聞き、親しく交際した体験を基にして書き綴った博覧強記の素晴らしいドキュメントであります。したがって、その内容は、1905年から1970年までのロータリーの出来事を書き綴った偉大な現象の歴史であります。

ところで、Harold Thomas は、何故この本を ROTARY.MOSAIC と名付けたのか。モザイクというのは、石の欠片とかガラスや木の欠片を集めて作る模様のことではありますが、Harold Thomas は、様々な思想が混在しているロータリーの思想の世界を恰もモザイク模様のように観じて ROTARY.MOSAIC と名付けたのであります。これは、ロータリーの思想の世界を象徴した真に巧みな命名であります。

例えば、「モザイク国家」という言葉があります。これは、様々な人種、民族、宗教をもっている集団が入り交じって、しかもそれぞれが溶け合わない状態の国のことを謂うのでありますが、それぞれの集団が

溶け合わないで、それぞれが厳然として主体性、独自性を保っているからこそ「モザイク国家」なのであります。

ロータリーの思想の世界も同じように、20世紀初頭の1905年以来、Paul P.Harris を初め Harry Ruggles、Arthur Frederic Sheldon、Chesrey R.Perry、Benjamin Franklin Collins、Glenn C.Meed、Dr.Allen Albert、Frank L.Mulholland、Guy Gundaker 等々の沢山の指導者を生み出しましたが、そのそれぞれの思想は、決して他の思想と溶け合わず、恰もモザイク模様のように厳然としてそれぞれの主体性を維持しているのでありまして、Harold Thomas は、この状態を見て取って、ROTARY.MOSAIC と称したのであります。

したがって、私は、曾てガバナーの時に、このロータリーの思想の世界を表現して、恰も夜空に輝く綺羅星の如く、様々な思想がお互いに排斥することなく、それぞれがお互いに他を認め合いながら、しかも一つの目的に向かって滔々と流れる大河の如く、今日に至っている思想の潮流であると謂ったことがあります。

ところが、今、このロータリー思想のモザイク模様が消えかかっているようにも思うのであります。そこで、このモザイク模様を形成しているそれぞれの思想を再確認しておきたいと思うのであります。したがって、次号からは、このモザイク模様の一つ一つを採り上げながら感想を申し述べたいと思います。

## 8. 「ロータリー・モザイク」 その2

前回は、Harold Thomas の著書「ROTARY. MOSAIC」は、歴代のロータリーの指導者に纏わる現象史であると申しました。そこで、今日は、その中の一人である Harry Ruggles に纏わる一つの物語を紹介しておきます。

1952年、Harold Thomas がローンデイル・ロータリークラブの Charter Night で認証状を授与した時についての一節があります（同著書23頁以下）。

それは、Harold Thomas が「最初のロータリークラブの結成をもたらした理念、即ち、職業と友誼の間に横たわっていた溝に橋渡しをする理念」について話をしていた時、一瞬、誰かがはっきりと力をこめて「ナンセンス！」と叫びましたが、それが Harry Ruggles であった、という一節であります。

Harry Ruggles は、何故「ナンセンス！」と叫んだのか、ということについて、今から30数年前の千種会（ロータリー研究会）で論議を呼んだことがあります。

実は、1905年に始まった原始ロータリーは、職業人の親睦と相互扶助だけを目的とした利己的なクラブでありました。しかし、1906年、Donald Carter によって対社会的な意義を自覚すべしとの警告を受けたことにより、Paul P.Harris は、世のため人のためのことも考えるクラブでなければならないと考えるようになり、Arthur Frederic Sheldon によって奉仕という考え方を取り入れるようになりました。そのためロータリークラブは、親睦のほかに奉仕をも目的とするクラブに変質して行ったのであります。そしてその後、ロータリーの中心概念は、今日に至るまで親睦

と奉仕なのであります。

しかし、Harry Ruggles は、その当時の大多数の会員達と同じく、クラブというものは、会員の親睦とその内容である相互扶助だけを目的とするべきものであるという考え方でありました。クラブの会員は、会員各自の職業上の利益を増進することをお互いに誓い合っているものであり、会員以外の者の利益など考えるべきでない、クラブというものは、元々そういうものであり、これからもそうあるべきだ、という考え方を一生変えなかったのであります。

だからこそ、Harold Thomas が「職業と友誼の間に横たわっていた溝に橋渡しをする理念」、言葉を換えて彼の考え方を補足すれば、「全ての職業人の心に親睦の橋渡しをする理念」、即ち、クラブの外に向けての橋渡しをする理念について話をした時、即座に「ナンセンス！」と叫んだのであります。

要するに、1905年の原始ロータリーにおいては、Paul P.Harris と Harry Ruggles は、共に親睦と相互扶助だけを目的として同じ道を歩き始めました。Harry Ruggles は、この道を一生変えませんでした。Paul P.Harris は、1906年、Donald Carter の警告を受けて、その道を変えました。そこに奉仕があったのであります。

ところで、Harry Ruggles と同じ考え方の人達は、現在も厳然として存在します。

しかしこの人達も ROTARY.MOSAIC の一片を形作っている私達の仲間なのであります。

## 9. 「ロータリー・モザイク」 その3

前回は、1905年の原始ロータリーにおいては、Paul P.HarrisとHarry Rugglesは、共に親睦と相互扶助だけを目的として同じ道を歩き始め、Harry Rugglesは、ひたすらこの道を歩きましたが、Paul P.Harrisは、1906年、Donald Carterの警告によりその道を変えたところ、そこに奉仕があった、という話を致しました。

それ以後、ロータリーの歴代の指導者達は、親睦と奉仕を中心概念としてそれぞれ思索を深めていくわけですが、Harold Thomasは、1916年と1917年の国際大会記録を読んだところ、この当時における相容れない二つの考え方の二つの流派の意見の中に当時のロータリーの考え方の傾向が示されている、と謂うことを指摘しています。(ROTARY. MOSAIC・P57以下)

そして、1918年度の第7代ロータリークラブ国際連合会会長レスリー・ビジョンの発言がこの論争に対する最も輝かしい貢献だとして紹介しています。

要約しますと、「ロータリーの第一の目標は、各個人をその日々の仕事に適切に関連させるにある。それは特定のサービスである。しかし同時に、ロータリークラブはその会員をして、それぞれの日々の仕事にサービスの理念を体得するように教育しなければならないと共に、組織としてのロータリークラブの力を強めるために、それとは違う異質のサービスが必要であることを見逃してはならない。キップリングが『ジャングルの法則』の中でこのことを美しく表現している。“群れの力は狼である。そして狼の力は群れである”」と謂うのであり

ます。

ところで、ここに謂う異質のサービスというのは、具体的には何を意味しているのか、この文章からは判然としないのでありますが、それが従来の個人奉仕に対しての団体奉仕を意味するとすれば、少し補足しておきたいと思います。

実は、クラブレベルにおける団体奉仕としては、既に1907年、シカゴクラブが公衆便所を設置しており、このクラブは、この事業の成功に力を得て1910年に公共問題担当委員会Civic Committeeを設置し、最古の委員会として今日も団体的社会奉仕を管轄しているのであります。したがって、レスリー・ビジョンの謂う異質のサービスとは、国際ロータリーレベルにおける団体奉仕を指しているものと思われます。

そうだとすれば、この意味の団体奉仕は、1912年頃からアメリカ社会に澎湃として起こっていた身体障害者養護学校設立の運動を契機として、Edgar Allenの提唱により1923年の国際大会において採択された決議第23-34号第6項に謂う団体的社会奉仕を意味することになります。

ところが、ここに謂う異質のサービスには、もう一つ団体奉仕の流れがあります。

それが1917年、第1次世界大戦に際し、国際奉仕のために第6代ロータリークラブ国際連合会会長アーチC. クランフが設定した「国際理解と親善のための基金」であり、この基金がやがて1930年に「ロータリー財団」となり、団体的国際奉仕の実践に繋がっていくのであります。

## 10. 「ロータリー・モザイク」 その4

前回は、1918年度の第7代ロータリークラブ国際連合会会長レスリー・ビジョンが「ロータリーの第一の目標は、各個人をその日々の仕事に適切に関連させる特定のサービスであると共に組織としてのクラブの力を強めるための異質のサービスが必要であると謂って、キップリングの“群れの力は狼である。そして狼の力は群れである”という言葉を用いていることを紹介しました。

ところで、このキップリングの言葉の意味を如何に理解するか、ということについて意見が分かれました。或る人は、“狼の力は群れである”という点に力点を置いて、この言葉は、ロータリーの奉仕が個人奉仕から団体奉仕に変わったことを意味すると主張しました。慥かに、そのような考え方もあるかも知れません。

しかし、私は、果たして、そのように謂い切ってよいのか否か、疑問なしとしないと思います。言葉というものは心を伝える道具でありますから、その意味を正しく理解するには、この言葉の前段“群れの力は狼である”という点にも平等に力点を置かなければ正しい意味を理解することは出来ないと思うのであります。したがって、“群れの力は狼である”とは、一匹々々の狼の力が強いからこそ狼の群れの力が強くなる、即ち、“狼の力は群れである”と謂えるのであって、これをロータリーについて謂えば、一人々々のロータリアンが謂わば“一匹狼”の如く強くなって、初めてロータリークラブが強くなる、したがって、各クラブが強くなることによってクラブの連合体である国際ロータリーも強くなるという意味であ

ります。即ち、この言葉は、一人々々のロータリアンを強くすることによって国際ロータリーの組織が拡大され強くなると謂うことを説いているのであって、Paul P.Harrisを初め歴代のロータリークラブ国際連合会会長が説いてきたロータリーの基本が個人奉仕であるという考え方が第7代連合会会長レスリー・ビジョンの発言によって団体奉仕に変わったことを意味するものではないと思うのであります。

ただ、第6代連合会会長 Arch C.Klumphが第1次世界大戦を契機に「国際理解と親善のための基金」を設定したことが団体奉仕の根拠となるようにも思われますが、この団体奉仕は、1923年の国際大会における34号決議に至って初めて一定の制限内においてのみ認められたものであって、明らかに時代が異なります。しかも、これは個人奉仕に取って代わるものではありません。このことは現在においても変わりはないのであります。

なお、ロータリアンを“一匹狼”のように強くするという事は、ロータリアンの肉体の力を強くするのではなく、ロータリアンの内なる人を強くする、詰まり教育の重要性を説いているのであります。このことは、レスリー・ビジョンが「こうした論争に続いて次から次に採択された大会決議は、いずれも教育の必要ということがロータリー生活における現実の姿の一つであることが確認されたことを示している」と謂っていることによって裏付けられると思うのであります。

## 11. 「ロータリー・モザイク」 その5

前は、キップリングの「狼の群れの力」の譬えに関連して、ロータリアンの『内なる人を強くする』こと、詰まり、教育の重要性について話しました。実は、『内なる人を強くする』という言葉の『内なる人』には三つの意味があります。第1は、理性の意味であります。理性がないと、何が正しいかの判断が鈍り、過ちを犯します。第2は、良心の意味であります。私達は、うっかりすると良心が鈍り、倫理が崩れます。

第3は、意志の意味であります。正しいことを実行する意志であります。

このような「内なるもの」を強くしていくことが、人間的成長のためには大切なのであります。そして、一人ひとりの人間的成長が社会改良のエネルギーになるのであります。したがって、『内なる人を強くする』という言葉は、優れてキリスト教的色彩の強い言葉ではありますが、倫理運動としてのロータリーとしては、欠くことの出来ない要素であります。この考え方がやがて1915年のサンフランシスコ国際大会において採択された「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓」所謂「ロータリー道徳律」として実を結ぶことになるのであります。

ところで、Harold Thomas は、この道徳律については殆ど触れていませんが、これはロータリー思想の視点からは、絶対に避けて通れない非常に重要なドキュメントでありまして、しかも、Harold Thomas の著書が「ROTARY.MOSAIC」と謂う以上、MOSAICを形成する重要な一欠片である「道徳律」についても一言触れておきたいと思えます。

先ず、Harold Thomas は、1910年のロータリークラブ全国連合会の討議の中から二つの貢献が生まれた、と謂っています。一つはシアトル・ロータリークラブの「綱領宣言」の提案であり、一つは、Arthur Frederic Sheldonが「最もよく奉仕する者は最も多く報いられる」という警句を用いたこと、その同じ大会で、ミネアポリス・ロータリークラブの Benjamin Franklin Collins が "Service, Not self" 「超我の奉仕」という警句を用いたこと、そしてその後の数年間にこの二つの警句はロータリーの非公式の標語として認められるようになった、と謂っています。実は、このうち Sheldon の標語は、実業倫理思想に基づくものであって、宗教的色彩はありませんが、Collins の標語 "Service, Not self" は、優れて宗教的色彩の強い標語でありました。Collins は、ロータリーに所謂奉仕とは、自己を否定して、宇宙を支配する神の秩序体系のもとに帰依することであると説いたのであり、将にこれは中世キリスト教神学の思想そのものであります。

そして、この考え方が Glenn C. Meed, Russel F. Greiner, Dr. Allen D. Albert 等当時のロータリーの指導者達の大方の考え方であり、やがて1915年のサンフランシスコの国際大会において「道徳律」の採択となって実を結ぶことになるのであります。

## 12. 「ロータリー・モザイク」 その6

前は、1910年のロータリークラブ全国連合会の討議の中から、Arthur Frederic Sheldonの「最もよく奉仕する者は最も多く報いられる」という警句が生まれ、その同じ大会でBenjamin Franklin Collinsの"Service, Not self"「超我の奉仕」という警句が生まれたこと、そして、やがてこの二つの警句はロータリーの非公式の標語として認められるようになったと謂うことを申し上げました。

実は、このうちSheldonの警句は、実業倫理思想に基づくものであって宗教的色彩はなく、この思想は、後に至って1921年頃"Service above self"という公式の標語を生むことになるのでありますが、これに対して、Collinsの警句"Service, Not self"は、優れて宗教的色彩の強い言葉であり、将にこれは中世キリスト教神学の思想そのものであり、この思想が後に至って1915年の国際大会において「道徳律」の採択となって実を結ぶことになるのであります。したがって、1910年に相次いで提唱されたこの二つの言葉は、原理的に考えますと、それぞれその棲んでいる世界が全く異なるのであります。

では、何故、原理的に相容れない二つの言葉が共存することになったのか、と謂いますと、実は、この二つの言葉が発表された当時は、ロータリークラブ全国連合会が創立されたばかりであり、ロータリーの指導者達の原理認識が未熟であったために、この二つの警句が発表されると、原理的な討議を全くすることなく、どちらも素晴らしい警句であるとして簡単に認めてしまったからであります。

そして、この二つの警句に象徴されるCollinsの思想とSheldonの思想は、この後もお互いに他の思想を排斥しないで共存していくことになるのでありますが、そればかりでなく、ロータリーの思想の世界は、これ以外にもDr. Allen Albertの思想、Frank L. Mulhollandの思想、Arch C. Klumphの思想、そしてGuy Gundakerの思想等々様々な思想が混在しながら、しかも、お互いに他の思想を排斥しないで、それぞれが独自性を保ちながら共存していくことになるのであります。これがロータリー思想の特徴であり、将にROTARY. MOSAICと謂われる所以なのであります。

このような原理的に相容れない思想の共存と謂うことは、キリスト教その他一神教の世界では絶対にあり得ないことでありまして、これは将にロータリー思想の独自性を示すものなのであります。このことから私は、ロータリーはあらゆる宗教を超えたものであると考えているのであります。

では、あらゆる思想の共存を認め合っていたロータリーが何故1980年に至って、Collinsの思想が生み出した1915年の「ロータリー道徳律」を廃止するに至ったのか。その理由は二つあります。一つは、道徳律第6条のアフターサービスについての規定があまりに厳しすぎることで、もう一つは、道徳律第11条の黄金律の規定があまりにキリスト教的色彩が強すぎることでありました。

### 13. 「ロータリー・モザイク」その7

前回は、ロータリーは、何故1980年に至ってCollinsの思想に基づく「ロータリー道徳律」を廃止するに至ったのか、その理由は二つあると申しました。一つは、道徳律第6条のアフターサービスについての規定があまりに厳しすぎることに、一つは、道徳律第11条の黄金律の規定があまりにキリスト教色彩が強すぎることに、この二つでありました。

先ず、黄金律の規定については、元来、ロータリーは、アメリカで創立されたものでありますから、思想的には当然のことながらキリスト教一色でありました。

やがて、ロータリークラブがカナダのウィニペグに創立され、1912年にはアイルランドの首都ダブリンとアングロサクソン文化の中心であるロンドンにも創立されました。そして、更にキューバにも創立されましたが、これらの拡大は何れもキリスト教国における拡大でありました。したがって、これまた当然のことながら、相変わらずキリスト教的色彩を強く残していたのであります。

ところが、1920年に至ってロータリーは、ヨーロッパとアジアに拡大されました。先ず、スペインのマドリッドにロータリークラブが創立され、次いで、フィリピンのマニラと日本の東京にもクラブが創立されました。そして、更に、インドのニューデリーにもロータリーが拡大されました。

この中で日本とインドは仏教国であります。そこで、日本のロータリーの指導者達は、アメリカ発祥のロータリーを受け入れるについては、日本の土壤に馴染むような

形にアレンジして導入したのであります。

そして、ロータリーを思想の世界で受け止め、ロータリーとは何か、ということを追求め、深層心理においてロータリーを理解したのであります。

そのため、ロータリー思想は、外来思想や日本古来の思想である国学や報徳教の思想などと比較して一体どのように違うのか、大いに研究が進められ、結局、報徳教の教えに最も近いものであるとせられて、これが昭和3年、東京における太平洋地域会議において、大阪クラブの土屋大夢が「ロータリー以前の偉大なロータリアン」と題して、二宮尊徳翁の思想を紹介することになったのであります。

また、英文の定款細則を和訳するとか、日本語のロータリーソングを作るとか、「ロータリー小唄」を作るとかして、ロータリーの導入に務めたのであります。

ところが、インドは、ロータリーには様々な宗教の人達が居るにも拘わらず、道徳律第11条がキリスト教の黄金律を規定しているのは不当であるというので、今まで何回も、この道徳律を廃止することを規定審議会に提案していました。

しかし、ロータリーは、全体としてはやはりキリスト教の色彩が強かったので、廃止するには到りませんでした。やがて1980年、Collinsの提唱した"Service, Not self"の思想が根底に流れる「道徳律」は、キリスト教色彩が強すぎるとして遂に規定審議会において廃止されることになったのであります。

## 14. 「ロータリー・モザイク」 その8

前回は、ロータリー道徳律が廃止された理由として、一つは、その第11条が黄金律を規定しているために、あまりにキリスト教的色彩が強すぎることに、もう一つは、その第6条のアフターサービスの規定があまりに厳しすぎることに2点を挙げました。

そこで、今日は第6条のアフターサービスについて触れておきます。この問題についても、実は、“Service, Not self”の思想とService above selfの思想の対立があります。

さて、ロータリアンたる者は、自分がお客様の所へ納めた商品については、徹底的に責任を負わなければなりません。そうでなければ信用を失墜します。したがって、例えば、時計を売りますと、1年間は自然の故障については無償で修理をするという保証がつきます。では、1年と3日経って故障したらどうするか。ロータリアンならば、無償で修理すると思います。何故かと言うと、保証というものは、お客様との保証契約に基づくものであり、それは法律の世界であります。したがって、保証契約上は、1年を経過すれば有償で修理すればよいのでありますが、ロータリーの世界は、法の世界ではなく、倫理の世界であります。

したがって、法の世界では、人と人との契約であっても、倫理の世界では、それは同時に神様との契約でもあるということの意味するのであります。

人と人との契約は、契約期間の満了によって終了しますが、神様との契約は、一生続くのであります。

このように考えれば、例え1年6ヶ月後の故障であっても、無償で修理をします。

3年後であればどうか。10年後であれ

ばどうか。或る人は無償で修理するかも知れません。ことは倫理の世界の問題でありますから、要は、その人の倫理観、世界観の問題であります。

そして、このような心構えで職業を営んでいると、僅かな修理代のことではあります。あの店で買えば大丈夫だという信用が確立して来るのであります。即ち、売買取引が、単に、時計と金銭とが交換されるだけではなくて、それと同時に、満足と感謝という目に見えないものが交換されることによって、やがて、商人は、信用という保護膜によって守られ、どんな不況期にも潰れない強靱な体質の企業を作りあげていくことになるということをロータリーは説くわけであります。この程度の問題については、“Service, Not self”の立場と、Service above selfの立場とで意見が割れることはありません。

ところが、お客様に納めた商品、例えば機械に欠陥があることが判明した場合、その全ての機械を回収し、完全な商品に修理して再びお客様のところへ届ける作業をすると、会社が倒産することが計算上明らかになった時にどう対処するか、という問題については、ロータリーの中でも意見は真二つに割れます。



## 15. 「ロータリー・モザイク」その9

前回は、アフターサービスを実行すると会社が倒産することが計算上明らかになった場合の対処については、意見が真二つに割れると申し上げました。

一つの意見は、たとえ会社が倒産することが明らかになってもアフターサービスを実行するべし、と説くのであります。

しかし、もし現実に会社が倒産すると、社員も役員も職を失い、家族も路頭に迷うことになります。奉仕も何も出来ないことになる虞があります。

ところが、このような場合でもアフターサービスを実行して成功した事例があります。それは、機械を製造・販売する会社の話ではありますが、或る時、納品した機械に欠陥が発見され、それを全部回収して修理し、再び全てのお客様のところへ届ける作業をすると、計算上、会社が倒産することが明らかになりましたが、社長は、ロータリアンとして、敢えてその作業を実行したのであります。

人との契約は、事情変更の原則などの理由によって解約することができますが、神様との契約は破ることが出来ません。そこで、欠陥のある機械全部を回収して、銀行融資を受けながら、何とかその作業を成し遂げたのであります。その結果、その会社は、絶大な信用を得て世界的な企業にのし上がって行ったのであります。

この事例は、何を物語っているのか？日本の諺にも『振り下ろす太刀の下こそ地獄なれ、身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ』とか『虎穴に入らずんば虎兇を得ず』と謂うのがあります。ロータリーは、そここのところを見ているのであります。

ロータリーは、行動哲学でありますから『先ず実行してみよ』と説きます。計算上赤字になって倒産するというのを『机上の空論』と謂うのであります。

要するに、企業というものは、アフターサービスを完全に実行して初めて発展出来るのであり、それがまた業界の見本ともなって、業界を改良して行くことにもなるのであります。ここにも、職業を通じての奉仕の実践例を見取ることができるのであります。

この考え方は、ロータリーの奉仕は自己犠牲の奉仕であると説きます。これは、1911年、Collinsが提唱した“Service, Not self”の思想に基づくものであります。即ち、自分を犠牲にしてこの宇宙を支配する神の秩序体系のもとに帰依すること、それがロータリーの奉仕であるというのであり、極めて宗教的色彩の強い標語であります。詰まり、Collinsは、「ロータリアンは、自分の為すべきことを為して美しく散れ」と説くのであります。

しかし、Paul P.HarrisやSheldonは、この考え方を採りません。ロータリーは宗教ではないから、“Service, Not self”と謂う自己犠牲の奉仕は行き過ぎである、として、Service above selfという実業倫理に基づく標語を提唱したのであります。時に、1921年頃のことでありました。このように、アフターサービスについては、二つの標語に象徴されるように、意見は真二つに割れているのであります。

## 16. 「ロータリー・モザイク」その10

前は、アフターサービスについては、Benjamin Collins の "Service,Not self" という宗教的色彩の強い思想に基づく標語と Arthur Sheldon の "Service above self" という実業倫理の思想に基づく標語という二つの標語に象徴されるように、その実践の仕方については、意見が真つ二つに割れていることを話しました。

そして、その何れの立場をとるかは、全世界のロータリアン一人ひとりの自由選択の問題なのであります。したがって、Collins や米山先生のように "Service,Not self" の自己犠牲の奉仕を実践する人もあれば、また、一方、Sheldon や Paul P.Harris のように "Service above self" の自己研鑽の奉仕を実践する人もあります。その何れの立場をとるかは、一人ひとりのロータリアンが自由に決めればよいのであります。したがって、或る人は、時には "Service,Not self" の自己犠牲の実践をすることがあり、また或る時には "Service above self" の実業倫理の実践をする、ということがあってもよいのであります。

本来、人間の思想や行動を原理的に、右か左か、白か黒か、というように一義的に割り切ることは出来ません。白から黒への間には、グレーゾーンの濃淡無数の段階があります。黒っぽい白もあれば、白っぽい黒もあります。この千変万化に変化する森羅万象を一義的に割り切るなど到底出来ることではないのであります。したがって、ロータリーの実践についても、親睦か奉仕か、とか、"Service,Not self" か "Service above self" か、とか、職業奉仕か社会奉仕か、というように二者択一の関係

に考えて、そのいずれか一方に決めつけることは妥当なことではないのであります。

例えば、職業奉仕的な社会奉仕もあり、また、社会奉仕的な職業奉仕もあり、更に国際奉仕的な職業奉仕もあるのであります。

ロータリーは、このような相反する対極的な価値関係について常に両者の調和という考え方を採ってきました。例えば、「利己と利他との調和」とか「親睦と奉仕の調和」とか「理論と実践の調和」と謂う考え方であります。したがって、私は、「ロータリーは調和の哲学である」とも考えています。

ところが、例えば、利己と利他とは全く相反することから、本来、調和出来るものではないのであります。利己と利他とが調和出来るのは、仏教で謂えば菩薩の境地でありますから、私達凡人には調和出来るものではありません。この故に、ロータリーは、利己と利他とが調和した菩薩の境地に少しでも近づくことを願ひながら例会で自己研鑽を遂げよ、と謂うのであります。したがって、利己と利他との調和は、実現の世界ではなくて念願の世界なのであります。これが実業倫理の世界であり、"Service above self" の世界なのであります。

以上を要するに、"Service,Not self" の思想と "Service above self" の思想の何れを採るかということは、一人ひとりのロータリアンが自ら随所に主となって自主的に決めればよい、と謂うことになるのであります。

# Harold Thomas 著「ロータリー・モザイク」総括 伊丹クラブ研修会

2014.6.21

深川純一

今年度、クラブ会長エレクトの山地秀俊先生を主催者として続けられて来ました「ロータリー・モザイク研究会」も、今日で最終回を迎えることになりました。そこで、今日は、1959-60年度国際ロータリー会長 Harold Thomas の著書「ROTARY・MOSAIC」の総括としての感想を申し述べたいと思います。

Harold Thomas は、1923年にロータリアンとなった人であり、今から数年前103歳の長寿を全うしてこの世を去りましたが、この本は、彼が、Paul P.Harris を始め歴代のロータリーの指導者達から直に話を聞き、親しく交際した体験を基にして書き綴った博覧強記の素晴らしいドキュメントであります。

まず、最初に、この本を一読して判ることは、著者自らが緒言において述べているように「今、私が企てようとしているのは、…一つには、ロータリー自体の進化の物語であり、一つにはロータリーの方針とプログラムの進化の物語であり、そして、或る一つにはロータリアンの進化の物語である」と謂うことであります。

したがって、この本は、1905年から1970年までのロータリーの出来事を書き綴ったものでありまして、謂わばロータリーの歴史を現象的に書き綴った「ロータリー外史」とも謂うべきものであります。

外史というものは、制度の歴史であります。

これに対して、当然のことながら、内史というものがあります。これは、制度の背後にある人間の思想の歴史であります。このように、歴史には色々な側面があります。

まず、歴史を現象の世界で捉えたものが制度としての歴史、即ち、外史であります。

例えば、頼山陽の「日本外史」は鎌倉幕府以降の武家頭領の血脈の歴史であります。

これに対して、歴史を本質の世界で捉えたものが思想としての歴史、即ち、内史であります。

このように、一つは現象の歴史、即ち、外なる歴史であり、一つは思想の歴史、即ち、内なる歴史であります。したがって、歴史を学ぶ方法としては、内史、外史の二つの側面から学ぶことが理想的なのであります。

そこで、現象史（外史）を縦糸とし、思想史（内史）を横糸として編み上げるような心持ちで歴史を学ぶと理解が深まると思うのであります。

現象の歴史は、思想を形成する素材に過ぎないのでありまして、現象史に関するものは、当然のこと乍ら、色々なハプニングがありますから過去の事実を100%構築することは出来ないのであります。したがって、内史をもって外史を補充する心持ちで読めばよいのではないかと思います。

このように致しまして、この「ROTARY・MOSAIC」は、ロータリーの思想史ではなく、現象史、即ち、ロータリー外史なの

であります。したがって、ロータリーの世界の諸々の現象から思想を学ぶ心を持つことが大切であります。

しかも、この本は、ロータリー全体の体系的な現象史ではなく、著者自らがロータリー創立以来の指導者から直に話を聞き、そして、ロータリー運動の中核にあって著者自身が直に体験した事柄に関する著述であります。したがって、その限りにおいて部分的ではありますが、しかし、真に説得力のあるドキュメントとなっているのであります。

このことは、著者自らが「緒言」において述べているように、『包括的な或いは客観的なロータリーの歴史を書こうとしているのでもなければ、ロータリーの特別の一面を語ろうとしているのでもない。…私の書こうとしているのは、一人のロータリアンの見た形成途上のロータリー史の若干面についてである。そして、その形成に力を貸した若干の人々についてである。』と述べ、『ロータリーは如何にして始まったかとか、ロータリーの正体は何かとか、とりわけその方針とプログラムは、何故今のように決められているか、ということについての概要をロータリアン達に手近に利用出来るようにするためである。』と述べていることから明らかであり、そこには著者の後輩ロータリアン達に対する温かい心が感じられるのであります。

更に、その著述の姿勢は、真に謙虚であります。翻訳者松本兼二郎パストガバナーも「訳者のことば」の中で述べているように、『私が最も心を打たれたのは、この本の中に一貫して流れる著者の考え方である。即ち、「ロータリーの中核にいと、末端にいとをを問わず、全てのロータリ

アンは、永遠に続くロータリー・モザイクの造成にみんな一役も二役も持っている」という考え方である。これは、曾て国際ロータリーの会長を務め、その前後50余年にわたってロータリーの中核にあって、ロータリーの方針とプログラムの決定について枢要な地位を占め、多大の影響力を持っていた人の驚くべき謙虚な言葉である。』と述べておられます。

この謙虚さということについて、一つのエピソードを紹介しておきます。それは32年間に亘って国際ロータリーの事務総長を務めた偉大なる組織管理者 Chesrey R.Perry が事務総長を辞任するに際し、国際ロータリーは、国際大会において彼に対し「名誉事務総長」の称号を贈ること提案しましたが、彼は、これを固辞して曰く、『私は、自分の為すべきことをしただけであって、何ら特別のことをしていない。これからは、一人のロータリアンとして余生を送りたい。』という趣旨の挨拶をしたそうであります。真に謙虚な言葉であります。

私自身の体験からしても、この謙虚さというものは、ロータリーの多くの指導者に共通するものであろうかと思うのであります。真に、ロータリーは、謙虚を学ぶところである、と思うのであります。

ところが、この本が書かれてから約40年後の現在の国際ロータリーの動向を見ますと、国際ロータリーの指導者達の中には、この謙虚な心を失った人が少なくないようにも思われるのであります。日本ロータリーの創始者米山梅吉先生がいみじくも「ロータリーの例会は人生の道場である」と喝破されたように、ロータリーというところは、ひたすら謙虚を学ぶところでありたいと思うのであります。

さて、そこで、緒言の話はこれくらいにして、1905～1910年代の著述から話に入って行きたいと思います。

まず、著者 Harold Thomas は、「変貌(形態の変化)」と題して、『ロータリーは、1905年2月23日に生まれたといわれている。しかし、私の感じでは、ロータリーの構想がその日、その場所において生まれたという方が実際になんていっていると思う。』と述べています。

これは、真に正鵠を射た考え方でありまして、この日は、現在、ロータリー創立記念日とされていますが、この時点では未だクラブとしての実体はありませんから、Paul P.Harris 達が4人で最初の会合を持ったという意味では、設立準備会の性格のものでありました。したがって、創立総会は、それから1ヶ月後の3月23日、会員9人でクラブの会長、幹事、会計を決め、クラブの名称を決めて、一つの組織として発足した日が創立記念日と呼ぶに相応しいのであります。

そこで、著者は、これに続いて、『私はまた、その時、実際にどんなことが話され、どんなことが行われたかということを知ること、ロータリーと、ロータリーの発達およびその業績のすばらしい物語を十分に理解する上に最も肝要なことの一つだと確信している。』と述べています。

実際、この2月23日の第1回の会合において、ロータリーの組織の原点とも謂うべき「一業一会員制の原則」が Paul P.Harris によって採択されているのであります。したがって、この原則は、ロータリークラブが創立される以前に、既に確立されていた大原則なのであります。したがって、著者も、『私の感じでは、ロータリーの構

想がその日、その場所において生まれたという方が実際になんていっていると思う。』と謂っているのであります。

そして、著者は、『ロータリーの最初の考え方、即ち、胚種は、Paul P.Harris と3人の友人、シルベスター・シール、ハイラム・ショーレイおよびガス・ロアーが話し合った最初の会合で生を受けたのに違いない。しかし、我々の知るロータリーというものが形を整えるまでには、胚芽の生成に相当長い期間があった。』と謂って、次のような話を紹介しています。少し長くなりますが、ロータリーのものの考え方の多様性、謂わばロータリー思想のモザイク模様を知る上で参考になると思いますので紹介しておきます。即ち、著者は次のように述べています。『論争の点…もしそれが論争と呼ばれるべきものならば…1952年に私が実際に経験した一つの出来事によって私の頭に刻みつけられたのであった。それはカリフォルニア州、ローンディル・ロータリークラブの認証状授与式の時であった。』

後に 国際ロータリーの会長になったカール・ミラーが時の地区ガバナーとして司会をしていた。私は、第一副会長として認証状を授与することになっていた。

私は、私が好んで用いるテーマ、「最初のロータリークラブの結成をもたらした理念」、即ち、それまでは常に職業と友誼の間に横たわっていた両者の間の溝に橋渡しをする理念、当時は到底橋渡しをすることの出来ない超え難きものと考えられていた溝に橋渡しをするという理念、について話をしてきた。

私の話の基調は、原始ロータリーの基本においても、また今日の組織化されたロータ

リーの基本においても、共に友誼が最も基本的な重要性を持つものだというにあった。

話は淡々と進んでいたかに思えた一瞬、誰かがはっきりと力を込めて、「くだらない！」と叫んだ。私は話を中断して言った。「この式が終わったら、今発言した人と話したい。」と。カール・ミラーが脇から私に教えてくれた。「今のは Harry Ruggles です。」

Harry Ruggles は、最初のロータリークラブの最初の 4 人の会員に続いて、最初に入会した会員で、第 5 番目のロータリアンとして知られている。Paul P.Harris は、Harry Ruggles について次のように書いている。「彼はビジネスの慣行に関する限り、あらゆる条件を満たして余すところがない。信頼できるし、時間は厳守するし、真っ正直だ。不正直などということは彼にとって考えも及ばないことだ。…友情に厚いこと彼の右に出るものはない。ロータリーの仲間と一緒にいるとき、彼の喜びは溢れこぼれるほどだ。クラブのプログラムに歌を取り入れたのは彼だった。ロータリーの友情にひたる幸福を表現するには、彼にとってこれしかなかったのだ。我らのハリーは実に稀に見る人物であった。』と。

そして、著者は、話を次いで、『典型的な会合後のロータリアンの集いで行われた討議においても、ハリーは、Paul P.Harris が記したような資質を全てさらけ出した。

私のスピーチの間に不意に発言したことも何ら他意なかったことがこの討議の間に明らかになった。…そして、私もまた彼の発言によって気を悪くするようなことのないことを明らかにすることが出来た。

ハリーの論点は、1905年にロータリーに加わった時、彼の頭にあったのは、

メンバーは皆各自の、そして同時に他の会員の、ビジネスの利益を増進することを誓っているのだということ、したがって、彼は、他のメンバーと同様に他の会員の利益増進につとめると同時に、自分自身にも財政上の利益がもたらされるということであった。ロータリーというものがそのような性格のものであった以上、彼はその通り口にすべきだと考えたまでであった。

私は、初期のロータリーについてのハリーの体験による知識と経験とに脱帽するのにやぶさかでなかったことは申すまでもない。しかしながら、私は、私自身の確信を固執して譲らなかった。』と述べています。

さて、以上の話から明らかなように、著者と Harry Ruggles との間には、ロータリーに対する考え方に根本的な違いがあることが解ります。それは、ローンディル・ロータリークラブの認証状授与式における著者のスピーチの途中で Harry Ruggles が「くだらない！」と叫んだことに象徴的に現れています。

では、何故、Harry Ruggles は「くだらない！」と叫んだのか、ということについては、それは一言で言えば、Harry Ruggles が原始ロータリーの世界にのみ生きてきた人であったこと、即ち、ロータリーの奉仕と謂う考え方を認めず、親睦の世界にのみ生きてきた人であったからであります。

そして、このことは、Harry Ruggles が少なくとも初期のシカゴクラブの中で大黒柱的存在であったことを示しているのがあります。したがって、このことは、彼が、ロータリーのあり方に就いて、自分なりの信念をもっていただことをも意味しているのがあります。

したがって、また、彼は、所謂ロータリー

の親睦がやがて職業奉仕に転化して行ったという著者の仮説を絶対に採らないということを意味しているのであります。以上によって、これだけのことは判るのであります。

では、何故、そのような結論になるのか、と謂いますと、Harry Ruggles は、ロータリーの世界で、親睦だけを貫いた人でありました。

彼が初期ロータリーの実情について考えていたものは、1905年2月23日から1906年にかけて、Paul P.Harris やその他のロータリアン達が考えていたものと全く同じであったことを意味するのであります。彼は、原始ロータリーの世界に生きた人でありました。

そして、Harry Ruggles は、その考えを生涯捨てませんでした。Paul P.Harris は、1907年からロータリーの世界に奉仕という考え方を提唱したために Harry Ruggles と考え方を全く異にするに至り、二人の心の遍歴の相違が互いに政敵たる地位に立たしめるに至ったのであります。

詰まり、1905年から Paul P.Harris と Harry Ruggles は、親睦の道と一緒に歩きました。そして、1907年に Paul P.Harris だけがその方向を変えました。その方向から奉仕が生まれました。(精神的親睦から職業奉仕)

しかし、Harry Ruggles は、方向を変えずに、ひたすら真っ直ぐに行きました。

奉仕は生まれませんでした。一番最初のロータリーの親睦(感性的親睦)だけがあったのであります。

このようにして、著者は、Paul P.Harris と同じ考え方でありましたから、Harry Ruggles との見解の対立となったわけであります。

なお、著者は、Harry Ruggles がクラブのプログラムに歌を取り入れたことを紹介していますので、そのことにも少し触れておきます。

それは、Paul P.Harris がクラブの3代目の会長になった当時、クラブは、従来の親睦と相互扶助の世界に、Paul P.Harris が奉仕という全く異質なものを提唱したために親睦は崩壊し、クラブは荒れに荒れたわけであります。当然の事ながら、会員の出席率も低下しました。

この状況を見て、当時、初代の親睦委員長であった Dr.William R.Neff は、この状態があと一ヶ月続けば、このクラブは崩壊してしまうと思ったのであります。

そこで、親睦委員長として、何とかこの状況を回復する手を打たなければならないと考えた結果、Harry Ruggles に、クラブの雰囲気は奉仕の話で冷え込んだときに歌を唄うことを提案しました。

そこで、Harry Ruggles もこの要請に応じて、クラブの雰囲気が冷たくなると、『諸君、歌を唄おう』"Hell ,fellows Let's sing!" と音頭をとってクラブの雰囲気を明るくしたのであります。これが実は、ロータリーソングの慣例の始まりでありました。

このようにして、初期のロータリアン達は、歌を唄うことにより童心と友情を取り戻し、奉仕の議論から解放されて、心と心を通わせることに成功したのであります。

入会の時には、その性格が実直にすぎて雅量がないのではないかと、思われた Harry Ruggles が、見事にロータリーの親睦の伝統を築いたのあります。

実は、この慣例には後日談があります。

それは、Harry Ruggles は印刷業者でありましたから、歌の歌詞を印刷して例会で

会員達に配ったのであります。

ところが、会員達はその歌の本を自分達の職場に持ち帰って唄った為に、会員達の職場で歌が流行りだし、それがやがて地域社会へ拡がり、ついには国家的行事として「歌の週間」National Week of Song にまで発展したのであります。

Harry Ruggles は、ロータリーの中で親睦の世界にだけ生きた人でありましたから、彼自身の主観においては、奉仕などという意識はなかったと思われます。

ところが、彼の作ったロータリーソングの慣例が、やがては、シカゴの街角に歌を生み出し、遂には、民衆の合唱運動として「歌の週間」National Week of Song として実を結ぶに至ったのであります。

これは、Harry Ruggles 自身の主観の如何に拘わらず、客観的に見れば、立派な社会奉仕であります。親睦の世界にのみ生きた Harry Ruggles の行為が結果的には奉仕となっていたのであります。

何はともあれ、ロータリーソングは、童心の回復がクラブ親睦の出発点でありますから、現在の「奉仕の理想」その他の所謂ロータリーソングを唄わなければならないという筋合いのものではありません。子供の頃に唄った歌、私達が日常慣れ親しんだ歌、気分が和やかになる歌であれば何でもよいわけであります。

これが、ロータリーソングの正しい慣例であります。したがって、奉仕概念が、どんなに高度に発展しても、この親睦の提唱は、決して間違っていないのであります。Harry Ruggles の業績は、高く評価されて然るべきものなのであります。

次に、著者 Harold Thomas は、「方針とプログラムへの試験的移行」と題して、次

のように述べています。即ち、『会員層の多様性の結果、幸いにもロータリーは、その会員中に人間活動のあらゆる分野における真に有能な人材を豊富に持っていた。理想を追い続けた哲学者もいれば、靈感を与えた改革家もいれば、或いはまたあらゆるレベルの組織を建設することに貢献した熟練管理者もいた。会員の中には、また、これらの要素の中のあるもの、或いは全部に何者かを貢献した数多くの万能家もいた。……これらの人達の中の三人は、その三人だけで上述の全てを適切な分量、適切な釣合で身につけていた。そして、神の摂理によるとしか思えないほど偶然に、この三人は、いい時に、いい所にいたのである。この三人とは、哲学者 Paul P.Harris、革新家 Arthur Frederic Sheldon、及び管理者 Chesrey R.Perry である。

Paul P.Harris の記念物はロータリーそのものである。Chesrey R.Perry の力によってロータリーは機能を発揮することが出来たのだし、Arthur Frederic Sheldon が方針とプログラムの基調を準備した。』と述べているのであります。

先ず、Paul P.Harris は、Chesrey R.Perry を評して、「自分は、ロータリーのデザイナーに過ぎないが、Chesrey R.Perry は、ロータリーのビルダーである。」と謂っています。これは、真に正鵠を射た表現であると思います。

一般的に謂って、優秀な思想が運動体を形成するためには、二つのものを達成しなければなりません。一つは、良質な思想であり、一つは、組織管理の原理であります。

先ず、良質な思想を開発することについては、ロータリーにあっては、Paul P.Harris、Arthur Frederic Sheldon、



Benjamin Franklin Collins、Dr.Allen Albert、そして Guy Gundaker という人達がロータリーの実体思想を形成することに非常に力があつたのであります。

もう一つは、組織管理の原理であります。

会員増強によってロータリアンが全世界に広がって来た場合、そのままでは烏合の衆でありますから、その人達を合理的に管理する原則を開発しなければなりません。この組織管理の責任を一身に集めて遂行したのが、Chesley R.Perry であります。

一般的に謂って、宗教団体の場合は、実体思想を開発する人と組織管理原則を開発する人が現れるのは、多少時代的にずれることがあります。著者も述べているように、ロータリーの場合には、ほぼ同じ時期にそれらの人が現れたということは、ロータリー運動にとって非常に幸せであつたと謂わなければならないと思うのであります。

今日、ロータリーの世界的な発展を見るにつけても、私達は、組織管理者 Chesley R.Perry の功績に深い敬意を表さなければならないと思うのであります。

ロータリーは、Paul P.Harris 一人で運動体を形成することは出来なかつたのであり、Chesley R.Perry によって初めて運動体を形成することが出来たのであります。

このようにして、私達は、Paul P.Harris を始めとする良質な思想の世界を理解することと同時に、Chesley R.Perry の開発した合理的な組織管理原則を理解しなければならないと思うのであります。

次に、1910～1920年の10年間は、主としてロータリーの拡大に関する記述であります。1908年にクラブNo.2のサンフランシスコロータリークラブが設立されて以来、1910年までに全米に設

立された16のクラブをもってロータリークラブ全米連合会という連合組織体が創立されました。この連合組織体が後に至って1922年、国際ロータリー Rotary International(R.I)になるのであります。

この時期のロータリーの拡大について、著者は『1910年の第1回の大会以後のロータリーの拡大には、実に目を見張らしめるものがあつた。この同じ時にはカナダのウィニペグにクラブが出来て、ロータリーは初めて国境を越えた。

1911年には、更に大西洋を越えて、アイルランドのダブリン及び英国のロンドンにクラブが出来た。1912年には組織の名称がロータリークラブ国際連合に変更された。』と述べています。

このようにロータリーが拡大されて組織が大きくなると、会員が増えて多種多様な意見が出て来る結果、様々な議論が交わされるようになりましたが、その議論のうち重要な問題は、先ず、(1) ロータリーは理論か行動(実践)か、(2) 行動は個人奉仕か団体奉仕か、(3) ロータリーは政治問題に取り組むべきか否か、(4) 社会奉仕と職業奉仕との何れを優先すべきか、(5) 国際ロータリーとの関係においてクラブは完全な自治権を認められるか否か、等の根本問題でありました。

これらの問題についてロータリーは、様々な議論と色々として試行錯誤を重ねた結果、やがて、1923年にセントルイスの国際大会において決議23-34号を採択することによって、原理的にその集大成を成し遂げたのであります。

ここまですべてが所謂原理探求のロータリーであります。それ以後は、具体的な実践方法を模索しながら1927年、国際ロータ

リーは、クラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕の四大奉仕部門を開発して、実践（行動）のロータリーに入って行ったのであります。

著者は、1910年代の段階における各指導者達の考え方について、簡単な紹介をしていますが、この本が現象史であるため、当然のことながら、著者が各指導者の思想に触れることはありません。したがって、ロータリーの理解を深めるためには、その思想を補充しておくことが望ましいと思うのであります。

そこで、先ず、著者は、ロータリークラブ全米連合会初代会長 Paul P.Harris の考え方については、Paul P.Harris が「換言すれば、私はロータリーの基本目的はビジネスにあると考える。」と謂っていることを簡単に紹介しているに過ぎません。

しかし、Paul P.Harris は、1910年にロータリーの中心概念である親睦と奉仕について、この両者は、ロータリークラブという社会制度において表裏一体の関係にある。いずれを優先させてもいけない。したがって、親睦と奉仕の調和の中にロータリーが宿る、と悟ったのであり、これがロータリー思想の原点であります。

そこで Paul P.Harris は、その気持を全米のロータリアンに訴えるべく論文を書きました。これが有名な論文 "Rational Rotarianism" であります。

これは、合理的な立場から考えると、ロータリーの思考というものは、どのような特徴を持った考え方なのか、と謂うことを解説したものであります。

Paul P.Harris は、この論文 "Rational Rotarianism" において『自分は、ロータリーの創立者として、神様の思し召しによ

り、一段と高いところに登ることを許され、ロータリーとは何かを問われれば、自分は躊躇することなく、【寛容】(toleration)と答えるであろう』と述べています。

これが Paul P.Harris のロータリー理論ロータリー寛容論であります。したがって彼は『ロータリーは、親睦と奉仕との調和の中に宿る』と説いたわけであります。

「ロータリーとは、寛容である。親睦も大切だが奉仕も大切。奉仕も大切だが親睦も大切。したがって、寛容な心を持つこと。自分の考え方を人に押しつけてはならない。このような考え方の世界の中にロータリーはある。」これが Paul P.Harris のロータリー論でありました。したがって、このような Paul P.Harris の思想の世界を忘れてはならないと思うのであります。

次に、ロータリークラブ国際連合会第2代会長 Glenn C.Meed の考え方については、著者は、Glenn C.Meed が「私自身の考え方は、ロータリークラブは主として個々の会員の全般にわたる啓発のためにあるので、クラブとしての公共の事柄についての活動範囲は断然限定さるべきものだと考える。」と考えている旨を紹介しているだけであります。これは現象の世界の問題であります。

しかし、Glenn C.Meed のロータリー思想は、中世キリスト教神学の思想以外の何ものでもない優れて宗教的な思想であります。これは、1910年第2回ロータリークラブ全米連合会の大会において、ミネアポリスロータリークラブの Benjamin Franklin Collins が提唱した標語 "Service, Not self" の思想でありまして、Arthur Frederic Sheldon が提唱した標語 "Service above self" の実業倫理思想とは、

鮮やかな対立を示すものなのであります。ここにロータリー思想の多様性の一端を見ることが出来るのであります。このことを補充して、理解すべきであります。

次に、ロータリークラブ国際連合会第3代会長 Russel F.Greiner の考え方については、彼が「私は、ロータリークラブは皆多かれ少なかれ公共の事柄に関心を持つべきだと強く主張する者である」と考えていると謂って、現象の一端を紹介しているに留まっています。

しかし Russel F.Greiner は、1915年のサンフランシスコの国際大会における「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓」所謂「ロータリー道徳律」作成の作業が始まった1913年度のロータリークラブ国際連合会会長でありまして、当然のことながら、その思想は宗教的色彩の強いものでありました。

次に、ロータリークラブ国際連合会第4代会長 Frank L.Mulholland の考え方については、著者は、Mulholland が、「私は、政治学の範疇に属するものを除き、ロータリーはあらゆる市民の問題に関心を持つべきだと確信する。純然たる政治問題には、ロータリーは手をつけるべきではない。ロータリーの目的は、各個人の中に奉仕する能力を発達させるにある。……しかし、クラブの功績に帰すべき素晴らしい活動もある。……私は、この両面から奉仕に参加する機会をロータリーのために保存する必要があると思う。」と考えている旨を紹介しています。

この表現は、やや解りにくいところがありますが、これを一言で集約しますと、理論と実践の調和、言葉を換えれば、心と行動の調和を説いているものであります。ま

た、別の見方からしますと、個人としての奉仕とクラブとしての団体奉仕の調和を説いているのであって、その結論が決議23-34号の第4項に所謂「ロータリーの奉仕とは何か」という問題の結論となって実を結んだものであります。即ち、Frank L.Mulholland は、決議23-34号の第4項において、『ロータリーは、理論・精神（人格の形成）と実践との調和の中に宿る』と説いたのであります。詰まり、ロータリーの奉仕とは、単なる心の状態に尽きるものではなく、実践に至って初めて客観化される行動の哲学のことを謂うのであります。

この言葉は、何を意味するのか、というと、実践できないことは口にするな、と謂うことを説いているのであります。

Frank L.Mulholland 曰く、『ロータリーの理論は正しい。しかし、その最大の欠点は、口先だけで実践を伴わない二重人格者を作ってしまうことである。したがって、ロータリーは、必ずしも金を出せと言っているわけではない。しかし、出さなければならないものについては、財布のひもをゆるめなければ、口先だけのことになってしまうではないか。したがって、実践の出来ないことは、一切口にするべきではない』というのであり、これが Frank L.Mulholland の基本的な考え方であり、決議23-34号第4項の意味するところなのであります。

ただ、この第4項で注意しなければならないのは、ただ単に実践すればよいとは謂っていないのであります。『理論から始まって実践に至るべし』即ち、理論の裏付けのない実践は、恰も方向舵のとれた飛行機のようなものであって、どこへ飛んで行くかわからない。したがって、奉仕の実践

にはならない、ということもまた謂っているわけでありまして、ただ闇雲に実践すればよい、ということではないのであります。これは大事なところであります。

それと同時に、いかに高邁な理論を説いても、それが実践されなければ、それは、絵に描いた餅、或いは燃えない石炭のようなものでありまして、これもまたロータリーの奉仕とは謂えないのであります。このようにして、Frank L.Mulholland は、ロータリーにおける理論と実践との調和を説いたのであります。

このようにして。決議 23-34 号第 4 項は、初期ロータリアンの思考の源流を集大成した最後の問題点を示していると謂えるのであります。謂わば、Frank L.Mulholland の考え方が、初期ロータリーにおける試行錯誤の最後の決着点となったのであり、それが、やがて 1927 年の国際ロータリー理事会が開発した四大奉仕の考え方、即ち、実践を中心に考えるという思考として実を結ぶに至るのであります。

次に、ロータリークラブ国際連合会第 5 代会長 Dr.Allen Albert の考え方については、著者は、Dr.Allen Albert が『本大会に提起されたあらゆる問題の中で、次の問題ほどロータリーの将来に関わる大きな問題はないと私には思える。即ち、クラブは公民活動にクラブとして参加すべきか、それとも各個人として参加すべきかの問題である。』と考えている旨を紹介していますが、これも現象の世界の一端を取り上げているに過ぎません。

Dr.Allen Albert は、その結論を示していませんが、彼の思想から謂えば、当然、後者の立場でありまして、個人倫理の確立を説くものであります。したがって、彼の思想は、ロータリーの奉仕は「実力の涵養

且つ人格の形成」にある、と説くものでありまして、元来、宗教的色彩の強いものであります。

次に、ロータリークラブ国際連合会第 6 代会長 Arch C.Klumph の考え方については、彼が『ロータリークラブの側にも、また、余りにも多くの個人ロータリアンの側にも、ロータリーとその目的、その目標、その理想について、明らかに認識不足がある』としてロータリーの在り方について独自の考え方を持っていることを紹介しています。

果たして Arch C.Klumph は、1917 年、その当時のロータリーの考え方からは全く乖離した提唱をしています。それは、「国際理解と親善を目的とする基金」の提唱であります。これが、時移って 1931 年に「ロータリー財団」と名称を変更したのでありますが、これは名称の変更だけであって、その実体は変わりません。

この基金は、第 1 次世界大戦を契機として、国際社会における戦争を個人の善意をもって解決していこうという国際奉仕を目的としたものでありましたが、実は、ロータリー運動の視点から見ますと、原理的には真に奇妙なものであります。

それは何故か、と謂いますと、ロータリーの奉仕は、本来、奉仕の心を作ることを第一義とするものであり、金を集めて何かの事業をしようとするものではないと考えられていたからであります。したがって、当時のロータリアン達は、「我々は、ロータリアンとしての忠誠心を持つが故に、Arch C.Klumph の提唱する基金に対して金を出すわけにはいかない」という考え方でありました。

したがって、Arch C.Klumph の考え方は、当時のロータリー運動に逆座をさすような

ものでありましたから、この基金の名称がロータリー財団と変わっても、金は集まらず、事態は Paul P.Harris がこの世を去った 1947 年まで続くわけであります。

そして、1947 年に Paul P.Harris の死を契機として、ロータリーの檜舞台でも思想の潮流が変わりまして、今日のような盛況に転ずるに至ったのであります。では、Arch C.Klumph は、1917 年に何故このような提唱をしたのか。

彼の考え方を分析しますと、先ず第 1 に、第 1 次世界大戦により国際奉仕の必要性は高まったが、国際奉仕の実践は、テリトリーの遙か彼方で行われるから、当時の交通機関の発達状態からして個人奉仕の実践は無理であります。

そして、ロータリー運動というものは、個人の善意を育てる運動でありますから、「心を求めて例会に至り、境地を得て例会を去る」という精神的親睦が本体であります。したがって、ロータリアンは、例会に集まるときは、ひたすら心を求めるべきであって、金を求めるべきではありません。

このようにして、ロータリーには、一つの思想の根源として、何か運動に参加することを通じて金を出すことを強要せられることを忌み嫌う慣例がありましたから、ロータリークラブには集金能力がありません。しかも、外国は遙かに遠いので、奉仕の実践には、金がかかります。

そこで、彼は考えました。クラブで金を集めるのではなくて連合会が金を集めればよい。したがって、連合会が全世界のロータリアンから無理のない金を集めて受託者になり、この金を個人奉仕に支出すれば、これが国際奉仕の実践になる、と考えたのであります。

これは、当時としては、全く破天荒な考え方でありましたが、時移って思想の潮流が変わって、現在では、この基金がロータリー財団として隆々と栄えていることは御承知のとおりであります。これもロータリーの多様性を示すものであります。

最後に、Arch C.Klumph の名誉のために彼の名言を紹介しておきます。曰く『ロータリー財団は、煉瓦や石の記念碑を建てるためではない。例え大理石に碑銘を刻んでも、やがては崩れ去るであろう。真鍮を使っても何時かは汚れてしまうであろう。だが、心の中に刻んだ碑銘にロータリー精神と人類愛を吹き込むならば、それは永遠に輝き続け、文明の続く限り、ロータリーを不滅のものとするであろう』と。

次に、ロータリークラブ国際連合会第 7 代会長レスリー・ピジョンの考え方については、彼が『キップリングの著書「ジャングルの法則」の中で”群れの力は狼である。そして狼の力は群れである”という言葉引用して、ロータリアン教育の必要性を強調している』ことを紹介しています。

そこで、レスリー・ピジョンが強調しているロータリアン教育の必要性ということの具体的な意味内容は何かということを手なりに補足しておきます。即ち、キップリングが引用している”群れの力は狼である。そして、狼の力は群れである”という言葉の意味内容をロータリー的に解説しますと、「群れの力は狼である」というのは、群れ、即ち、ロータリアンの集まりであるロータリークラブの力は、一人ひとりのロータリアンの力あればこそ発揮されるのであり、そして、その一人ひとりのロータリアンの力が集まってクラブの力は発揮されるのであります。詰まり、一人ひとり

のロータリアンが将に一匹狼のように強くなって初めてその集団であるクラブも力量を発揮することが出来るということであり、

要するに、ロータリアン教育を徹底して、一人ひとりのロータリアンを強くすることによって、ロータリアンの集まりであるクラブが強くなり、クラブが強くなることによって、クラブの集団である国際ロータリーも強くなるのであります。

したがって、ロータリーにとって一番大事なものは何か、と謂うと、一人ひとりのロータリアンを強くすること、詰まり「人作り」であります。

このことについて参考となるのは、思想家エマーソンの言葉であります。即ち、『文明の価値は何によって測られるか。都市の大きさや人口、収入の多寡ではない。その文明が如何なる人を作ったかによって文明の価値は測られる』というのであります。

そして、この言葉は、1974～75年度の国際ロータリーの会長ウイリアム・ロビンスの言葉に通じるものなのであります。即ち、『ロータリーの価値は何によって測られるのか。それは 国際ロータリーやロータリークラブの規模の大小や会員数の多寡ではない。そのクラブが如何なる人を育てたかによってロータリーの価値は測られる』と謂うのであります。

日本ロータリーの創始者米山梅吉先生が、『ロータリーの例会は人生の道場である』と謂いきったように、ロータリーは人を作るという考え方こそ、倫理運動であるロータリーの根底に流れる思想なのであります。

さて、著者による当時の歴代指導者の紹介は、以上で終わっております。

次に、著者は、1910年には、既にアメリカ国内に16のロータリークラブと1800人の会員が居ましたが、それが10年後の1920年には、全世界15カ国に合計750のクラブが出来、5万6千人の会員を擁するようになったと述べて、更に、この10年間には、このようなロータリーの拡大の他に、ロータリーの哲学と呼ばれるものにも著しい変化がもたらされたと述べています。

しかし、その著しい変化というものの内容は、ロータリーの綱領（目的）に関するものが記されているだけであり、その他に思想的な変化については何一つ記されていないのであります。これは、この本が現象史であることからして蓋し当然のことです。

したがって、私達がこの時代のロータリーの理解を深めるためには、内史的な思想の話を補充しておく必要があります。

この点で、忘れてはならないのは、1915年のサンフランシスコの国際大会で採択された「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓」所謂「ロータリー道德律」であります。これは、その第11条にキリスト教の黄金律が規定されているが故に優れてキリスト教的色彩の強いドキュメントであります。将にそれなるが故に1980年の規定審議会において廃止されました。

その主な理由は二つありました。一つは、この 道德律第6条のアフターサービスの規定内容が余りに厳しすぎることであり、もう一つは、第11条に黄金律が規定されていたことでもありました。殊に、ロータリーは1920年以降、キリスト教国のみならず、日本を始めインドその他仏教、神道、

儒教、ユダヤ教などの国々にも拡大されましたが、ロータリーは世界中の人達の様々な宗教が集まっているのに、その精神的支柱である道德律にキリスト教の黄金律が規定されているのは妥当でないという理由でありました。このこともロータリーの多様性を示すものなのであります。

ただ、この道德律の廃止は、国際ロータリーレベルにおける廃止に過ぎないこと、即ち、廃止になったことを国際大会その他 R I レベルでは主張出来ないだけのことであります。したがって、クラブレベルや個々のロータリアンレベルでは、未だに、この道德律を心の糧としている人は多いのであります。

また、この著者が全く触れていませんが、1912年から始まった Edgar Allen の身体障害者養護学校設立の運動は、それがやがて1923年にセントルイスの国際大会において決議23-34号の採択となって実を結ぶことになるのでありまして、現象史としても忘れてはならない事柄であります。

このようにして、この本は、現象史ではありませんが、その現象は、著者が現実に体験した限りでのものでありますから、当然のことながら、著者の体験から洩れたものもあるのは止むを得ないのでありまして、私達は、その洩れた部分を補充して学ばなければ歴史の正しい理解は出来ないことになるのであります。

なお、この時代の現象史に付け加えなければならぬものとして、1919年、第1次世界大戦を契機としてソルトレイクシティの国際大会において国際奉仕の概念を開発し、更に、その2年後の1921年、エジンバラの国際大会において国際奉仕の概念を完成して宣言していること、そして、

その翌年の1922年、ロサンゼルスでの国際大会において国際ロータリー定款および標準ロータリークラブ定款を採択するに当たり、この国際奉仕の宣言をそのままの形で定款第4条ロータリーの目的にそれぞれ規定していることも忘れてはならない事柄であります。

次に、1920～1930年の10年間は、ロータリーが創立から1927年までの22年の間に、様々な試行錯誤を経験しながら、思想的にも、原理的にも、組織的にも、そして実践的にも集大成されて行った時代であります。

著者は、この10年間の記述において、

1. ロータリークラブ国際連合会が、国際ロータリー Rotary International(R.I) となったこと、
2. 国際奉仕が開発、完成されて宣言されたこと、
3. 職業奉仕が具体化されたこと、
4. そして、何よりも重要な問題として

1923年の決議23-34号の採択などについて紹介しています。

ただ、著者は、職業奉仕の記述において、「道德律」に触れていますが、著者の謂う所の「道德律」は、1915年の「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓」を指しているのではなく、1922年の全米レストラン連合会などの同業組合に範をとったものを指しているようであります。

したがって、ここで謂うところの道德律と謂うのは、ロータリーの綱領における倫理を問題にしているものであり、この点、「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓」と誤解しないよう留意すべきであります。ロータリーの綱領における倫理思想は実業倫理思想であります。ロータ

リー道徳律」における倫理思想は宗教的色彩の強いものであります

また、著者は、1922年にロサンゼルス国際大会において国際ロータリーが成立したこと及びその定款・細則が採択されたことに触れていますが、この点について忘れてはならないことは、この細則第16条において、1915年に採択された「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓」所謂「ロータリー道徳律」をロータリーの現行法則として規定したことであります。

この規定によって「ロータリー道徳律」は、法規としての効力即ち、規範的効力をもちました。そのため「ロータリー道徳律」はキリスト教的色彩が強いとの理由によって、インドから再三に亘って廃止の提案があったにも拘わらず、1980年まで、その効力を維持したのであります。将に、これは、細則第16条によって、法としての効力があつたからあります。

また、著者は、1927年のオステンド国際大会において、グレートブリテン及びアイルランドの連合体、所謂「R I B I」の存続を認める規定が批准されたことを紹介し、『不幸にして、R I B Iが国際ロータリーとの関係において、如何に運営されるべきかについての特別規定の成文が、余りにも明確を欠いていたために、両者の間に厄介な問題がその後にも持ち越されることになった。』と述べています。

これは、具体的にはどのようなことかと申しますと、話は遡りますが、1914年のヒューストンの国際大会において、イギリスとアイルランドのロータリークラブ群からの提案として、「ロータリーはアメリカで発祥したが、イギリスはアメリカの

母国であり、イギリスにはイギリス独自のロータリーがあつて然るべきものであるから、イギリスとアイルランドのみから成る地域単位の連合体を認めて欲しい」という提案があつたのであります。

その当時、ロータリークラブ国際連合会は、1912年に発足したばかりであり、組織原理の研究も未だ充分に出来ていなかったため、イギリスのクラブ群からの提案に対して、それは結構なことであるとして簡単に承認してしまつたのであります。これが、所謂「R I B I」の誕生であります。

これは、原理的には一体何を意味するのか、と申しますと、ロータリークラブ国際連合会の組織の中にR I B Iという中間管理組織体を承認したことを意味するのであります。

では、その結果、どのようなことになるのか、と謂いますと、連合会の財務管理の面では、R I B I傘下のクラブ群からの人頭分担金収入は、全てR I B Iに入ることになり、連合会には一銭も入らないことになるのであります。

また、理論管理の面では、ロータリーの奉仕理念の追究はR I B I独自の理念で追究することも可能となります。更に、情報管理の面でも、R I B I傘下の各クラブからの情報が連合会へ届かないことにもなります。

そこで、ロータリークラブ国際連合会は、R I B Iを承認した後で、これは拙いことをしたと気がついたのであります。そこで、直ちに翌1915年、地区制度を設定して、各地区に連合会の役員としてガバナーを置いて地区内クラブ群の管理に当たさせたのであります。

そして、R I B Iに対しては、その解体



を要請したのでありますが、R I B Iとしては既得権を持っていますから、中々これに応じなかったのであります。

その後、著者によれば、1957-58年度に財務管理の人頭分担金の問題は解決したようであります。

しかし、人事権については、R I B Iは、頑としてその名跡を譲りませんから、1922年にロータリークラブ国際連合会が国際ロータリーになった後も、未だに、国際ロータリーの役員として、R I B Iの会長、副会長、事務総長などが入っているのであります。このことは、国際ロータリーの組織管理上は、原理的に好ましくないことなのであります。

なお、国際ロータリーにおける中間管理組織体であるR I B Iについては、時間の関係でこれ以上の詳述を割愛しておきます。

次に、1930~1940年の10年間について、著者は、『緊迫と心労の時であり、心の探索と魂の探索を要した時であり、根本的決定をしなければならない時でもあった。』と述べています。かなり抽象的な表現ではありますが、要約すれば、1929年に始まる経済恐慌から第2次世界大戦の勃発にいたる混沌の時代を現象的に述べているのであります。

著者は、元国際ロータリー会長アンガス・ミッチェルとの出会いの物語に始まり、フランクリン・D・ルーズベルトのニュー・ディール政策、そして、戦争勃発に至る諸々の事柄を現象的に述べていますが、ロータリーの特記すべきことは、組織原理の問題として1934年に第1回規定審議会が国際大会の一部として開催されたこと、そして、1933年、後に至って国際ロータリー会長となるHerbert J.Taylorの四つ

のテストであります。

ただ、著者は、この四つのテストについては、『Herbert Taylorの名は余りにも密接に四つのテストと結びついて人々の脳裡に刻まれていたために、Herbertがロータリーのために、教会のために、地域社会のために、更には、全世界の人類社会のために捧げた個人的奉仕による多くの優れた他の貢献については、とかく忘れられがちであった。』と抽象的に述べているに過ぎませんので、具体的には如何なる事実を述べようとしているのか、ということがよく解らないのであります。したがって、現象史としては、もう少し具体的事実を補足すべきであろうかと思うのであります。

そこで、その補足すべき事実の一つを紹介しておきます。それは、四つのテストが職業奉仕における「ノウ・ハウの公開」の原理の重要な要素となっていることであります。即ち、それは、Herbert J.Taylorが四つのテストを考案して、倒産したアルミ食器会社を再建したとき、シカゴ商工会議所の人達がHerbert J.Taylorに対し、『その四つのテストというノウ・ハウは、君が倒産会社を再建したことによって成功することが証明された。それを皆に披露しよう』と言って、商工会議所傘下の企業家達に紹介されたものであり、そのことが契機となって、国際ロータリーが四つのテストの版權を譲り受けたことであります。したがって、四つのテストは、ロータリー的には、職業奉仕におけるノウ・ハウの公開の原理として忘れてはならないものなのであります。

次に、1940~1950年の10年間について著者は、その章の冒頭において、「第二次世界大戦に関する事実は周知であ

る。ここではただ、この大戦の続く限り、家庭生活も、事業生活も、その他あらゆる個人的責任は悉く、我々は戦争をしているのだという事実と結びつけなければ焦点を合わすことが出来なかったとだけ言っておこう。他の事柄は、悉くこの一つの冷酷な事実によって支配されたのであった。」と述べており、その当時の様々な社会的現象を縷々記述していますが、ロータリーには何ら特記すべき事実はなかったと考えられるのであります。

ただ、その当時の著者の心情を吐露した言葉、『私はたった一人に過ぎない。然り、一人なのだ。私は何もかもすることは出来ないが、何かをすることが出来る。だから神のお力添えによって、その私に出来ることを断固行うのだ。』という言葉は非常に印象的であります。そして、この言葉は、この本の1970年代の章の一番最後に、この本の結語として繰り返して述べられているのであります。

そして、著者は、戦後、クラブが解散させられていたドイツと日本のロータリーを国際ロータリーに復帰させることについて、『アンガス・ミッチェルは、ドイツと日本では強権によってクラブが閉鎖させられこそしたが、これらのクラブの元会員の大部分の心の中と脳裡にはロータリーの精神が生きていることを確信していた。』と述べていますが、このアンガス・ミッチェルの確信は、将に当時の日本の元会員の心情と合致していたのであります。このことは、日本ロータリーの歴史が証明しているところでもあります。このことについては、いずれ機会があれば、戦後のロータリー史として申し述べたいと思います。

次に、戦後の1950～1960年の

10年間は、主として国際ロータリーの理事の責任についての叙述であります。ここでは、理事会の構成や理事会メンバーの多様性などについて縷々述べられていますが、その中で一つの問題は、理事の定数の問題であります。

そこで先ず、国際ロータリーに何故理事会があるのか、ということから話に入りたいと思います。そこで、国際大会というのは、全世界のロータリークラブの代表をもって構成せられるところの国際ロータリーレベルにおける最高決議機関であります。

ところが、国際ロータリーというのは職業人のボランティア活動でありますから、国際大会に一年中代表を送っていることは出来ません。

元来、審議機関というものは、国会や地方議会を見ても判りますように、常時開かれているものではありません。毎日開くとエネルギーロスが多くなり、冗費節約の点から見ても賢明なことではありません。したがって、殆どの国の国会は、年に何回しか開かれていないのであります。

殊に、ロータリーでは、会員は皆、他に本職を持っていますから、ボランティアとして毎日金を使って議場に詰めているわけにはいかないのであります。したがって、国際大会は、毎年5月か6月に1週間位開かれるだけであります。

しかも、国際大会で決めるのは、一般的なルールの定立だけでありますので、これだけでは何の処理も出来ないのであります。

そこで、準常設的な機関を国際大会の下に作っているのでありまして、これが国際ロータリー理事会であります。したがって、国際ロータリー理事会というのは、国際ロータリーレベルにおける国際大会乃至

規定審議会に次ぐ2番目の決議機関なのであります。したがって、国際大会決議乃至規定審議会決議の支配に服するのであります。したがって、また、ここで取り決めたことは、全世界のロータリークラブに対して、第1に、直接監督権のあるものについては、拘束力を持ちます。第2に、指導・助言権については、少なくとも通知が行きます。

ところで、国際ロータリー理事会は、1969年までは13名の理事をもって構成されていました。そして、1970年にこれが増員されまして、15名の理事及び会長・会長エレクト、合計17名の理事をもって構成されるようになりました。

そして、更に、1995年、規定審議会の95-91号議案による34ゾーン制が採択されて、その半数交代制によって、理事17名及び会長・会長エレクト合計19名をもって構成されるようになったのであります。これが現在の理事会の構成であります。

理事の任期は2年で、半数交代制を採りますから、毎年、半数づつを入れ替えながら理事会は動いていくのであります。

そして、理事は無給であります。ただ、全世界から集まるといことになりますと、無給のボランティアである、とばかり言うておられないので、この場合には、往復の旅費と若干の日当が支給されます。しかし、労務の提供に対する報酬は一切出ていないのであります。

理事の選任方法はどうか、と謂いますと、理事の選挙母体というのは、国際ロータリーの組織管理から見て、全世界のロータリークラブをグルーピングして一番末端の最も小さい組織を地区として、

そこに国際ロータリーの役員として地区ガバナーが1人います。そして、数地区をもって1ゾーンを構成します。

このゾーンが国際ロータリー理事1名を選出する選挙母体なのであります。

そして、以前は、数ゾーンをもって1リージョン Region を構成し、このリージョンは、理事の定数を定める単位となっていたのであります。したがって、後で述べますように、例えば、第1のリージョンであるUSCB (U.S.A Canada. ハーミューダ諸島&プエトリコ) の理事は、6名が定数であります。

ところが、近年、このリージョン制度は廃止されて、前述のとおり現在は34ゾーン制が採択され、全世界を34ゾーンに分割し、各ゾーンから理事1名が選出され、2年毎の半数交代制になっているのであります。

では、何故、リージョン制度は廃止されたのか。

私の推測では、国際ロータリーは、R I B I の異常性を消し去りたかったからではないかと思うのであります。そのことは、リージョンの内容を見ればよく判ります。即ち、リージョンは、全世界を六つの地域に分割して定められていますが、そのうち五つのリージョンは、何れも五大陸にも比すべき広大な地域であります。R I B I だけは、イギリスとアイルランドという極めて小さな地域であることを見れば、その異常性がよく解ると思えます。

これは、前述のように、1914年、ヒューストンの国際大会において、ロータリークラブ全米連合会の原理認識が未熟であったが故に、将に一つのハプニングとしてR I B I を連合会の中間管理組織体として承認してしまった結果であります。

そこで、参考までにリージョン Region の内容を説明しますと、第1のリージョンは、U S C Bであります。その地域範囲は、U.S.A Canada. Bermuda&Puerto Rico の広大な地域であり、6 Zone をもって構成されており、したがって、理事定数は6名であります。第2のリージョンは、R I B I 即ち Rotary.International. GreatBritain&Ireland であります。その地域は、イギリス一国のみの極めて小さい地域であり、1 Zone のみで構成され、したがって、理事定数は1名であります。第3のリージョンは、CEEMA(CentralEurope. EastMeditarian.&Africa) であります。中央ヨーロッパ、東地中海地方、アフリカに亘る広大な地域であり、3 Zone をもって構成され、理事定数は3名であります。第4のリージョンは、ASIA であります。これもアジア全体に亘る広大な地域であります。3 Zone をもって構成され、理事定数は3名であります。第5のリージョンは、SACAMA(SouthAmerica. CentralAmerica.Mexico.&Antilese) であります。その地域は、メキシコ以南の中南米諸国という広大な地域であり、2 Zone をもって構成され、理事定数は2名であります。第6のリージョンは、ANZO(Australia. NewZealand.&Others) であります。その地域は、オーストラリア、ニューランド及びそれ以外の全ての地域であります。1 Zone をもって構成され、理事定数は1名であります。

そして、このほかに Additional 理事が1名選任され、これと R I 会長及び会長エレクトを入れて合計18名でありました。

以上がリージョン制度の内容でありました。尤も、このリージョン制度は、今申し

あげました通り廃止されましたが、歴史を学ぶときには、例えば、太平洋地域会議、即ち、太平洋 Regional Conference という言葉を理解するためには知っておかなければならない事柄であります。

ただ、理事会の審議状況について、著者は、『時間の許す限り、討議は常に最大限自由に行われる。激論が戦わされることも決して珍しくない。』と述べています。しかし、1950年代当時は、そうであったかも知れませんが、日本から出た元理事の話によれば、現在の理事会の状況は、これとは全く異なるようであります。それは、審議案件があまりに膨大なために、その案件は多くの委員会に配分され、各理事は、自分の担当委員会ではその案件の審議に参加しますが、各理事が一堂に会する理事会の場では、時間の関係で各案件について十分に審議することが出来ず、殆どが書面審議に終わってしまうとのことあります。

これも組織が巨大になったためでありまして、理事会の在り方も一考を要する問題になっていると思うのであります。

次に、1960～1970年の10年間について、著者は、『国際ロータリー組織及び手続委員会の報告は幾つかの主要な変更をもたらした』という前書きに始まり、特にインター・アクト、ローターアクトを紹介し、これ以外にも『最近ロータリーのプログラムに加えられた典型的なものとしては、世界社会奉仕、その他青少年指導者賞、青少年研究会、青少年功績賞、ロータリー青少年交換、学生交換、及び R Y L A (青少年指導者養成プログラム) 等の名称を持つ種々の企画がある』と紹介しています。

これらのプログラムの中で特に世界社会奉仕は、現在飛躍的な発展を遂げており、

また、ロータリー青少年交換とRYLAも近年完全に市民権を得たプログラムとなっています。殊に、RYLAは、近時、国際RYLAを開催するまでに発展しています。

ただ、この時代の現象史としてこの著書に欠落している重要な問題として、ロータリーの組織原理の基礎にある「職業分類表」の基準となっている所謂「赤本」(Guide to Classification)を国際ロータリーが放棄し、職業分類表の作成を各クラブに委託してしまっただけがあります。これは国際ロータリーの直接監督権の放棄でありまして、国際ロータリーとしては原理的にも実践的にもあってはならないことでありました。この結果、一業一会員制の原則と規則的例会出席の原則という組織原理の基本前提が崩壊して終わったのであります。

実は、1968年は、このことを始め、魔の1968年と言われるほど、規定審議会を通じてのロータリーの原理認識の衰退が始まった年でありました。

最後に、1970年代について、著者は、その1970年代の章の冒頭において、『我々多くの者は憂慮に耐えないのであるが、ロータリーがその上に樹立されて今日の力と安定にまで築き上げられた、その基本的特質の二つが次第に希薄に、更により希薄にされる方向に向かう傾向がある。この二つとは、会員制度における職業分類の原則と、もう一つは例会への規則的出席である。』と述べて、ロータリーの将来への不安の念を示しています。

著者のこの不安は、やがて後日現実のものとなりました。即ち、ロータリーの創始者Paul P.Harris自らが1905年2月23日に決めた会員制度における職業分類の原則、即ち、一業一会員制の原則は、

2001年の規定審議会の決議によって廃止され、また、1905年3月23日にシカゴクラブの創立総会において採択された規則的例会出席の原則は、1968年以降の規定審議会の決議による度重なる規制緩和によって全く有名無実となったことは、既に御承知のとおりであります。これらの変化は、全て1947年にPaul P.Harrisがこの世を去ってから後の出来事でありました。

著者は、数年前、103歳の長寿を全うしてこの世を去りましたから、これらの事実は知っていたと思われる。著者の心中如何ばかりであったかと察せられるのであります。

著者没後もロータリーの衰退は、単に規制緩和に留まらず、真に目に余るものがあります。物質的な繁栄は、精神の衰退を招くとも謂われます。今後、ロータリーの世界がどのように変遷していくのか、心あるロータリアンの憂慮しているところであります。

ただ、1970年以降の国際ロータリーが激変していく現象は、この著者の説くところではありませんので、今日はこの辺で失礼致します。御静聴有り難うございました。



## あ と が き

今年度も「ロータリアンとは その1」から始まり「ロータリーモザイク その10」まで、16回に渡り「純ちゃんのコーナー」を聞き続けることが出来ました。次に続く我々に、淡々とした語り口の中に秘めた、決して時代に迎合しない自らのロータリー哲学を語る深川会員に対し、体の芯から敬意と、感謝を申し上げます。

今からさかのぼること14年前、竹中会員の発案により、深川会員による3分間卓話、「純ちゃんのコーナー」が誕生しました。翌年、この1年間の卓話を深川会員にまとめていただき、竹中会員の多大のご尽力により、小冊子「純ちゃんのコーナー」が発刊され、今回に至りますまで13巻を重ねることが出来ました。この年月の積み重ね、即ち深川会員の献身的なご努力により、今、じんわりと、しかし深く我々伊丹ロータリークラブの中に、ロータリーの真髄が浸透していることを確信しております。

最後になりましたが、あらためて、深川会員に感謝を申し上げ、今後も素晴らしい卓話をお願いしますと共に、この「純ちゃんのコーナー」を発案した竹中会員と、本巻の出版にご尽力をいただきました前年度大森会長、池信幹事、そしていつもお世話をいただいている事務局の皆様方に感謝申し上げます。

2014年10月 雑誌・ロータリー情報委員会

